

# 室内

毎月7月号(通巻535号)ISSN0287-8747

平成2年7月1日発行 毎月1回1日発行

昭和127年3月3日第三種郵便物認可

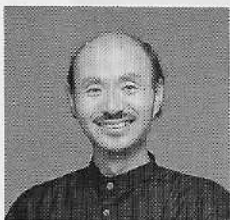
1990 No.427



インテリアの情報誌

特集=水が魅力のインテリア ●「輸入住宅」の現状と業者リスト





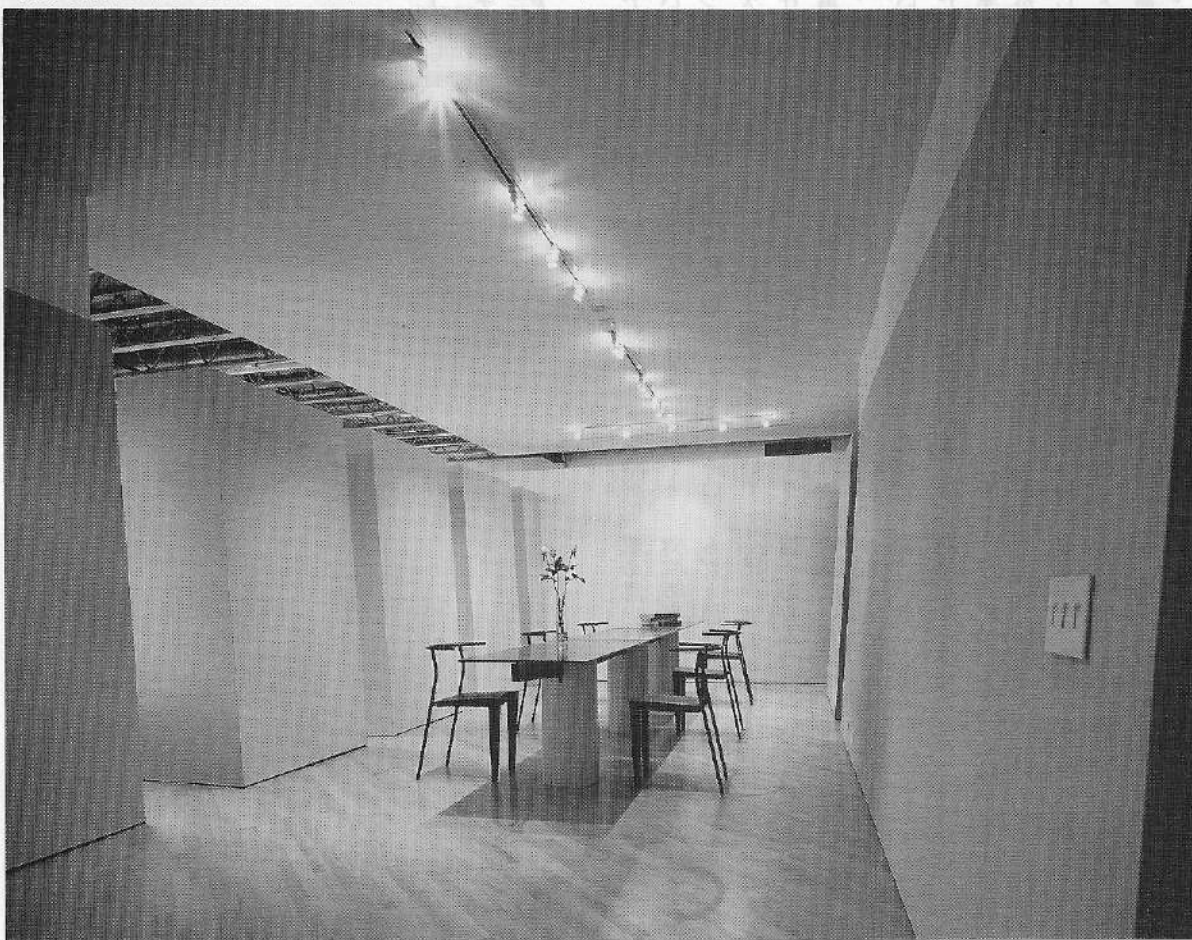
推薦者●五十嵐威暢(デザイナー)

精神的な豊かさを象徴するような空間とでも言おうか。華美でなく、かといって質素でもない。更に、作者の造形に対する一方的な欲望がチラチラすることもない。しかし、確かに期待を裏切らない健康的な空間の存在を田中玄は目指しているように感じる。

# インテリア次代をになう人々

7  
田中玄

イガラスステュディオ USA (サンタモニカ、カリフォルニア) 撮影/Kenji Shirato





Ken Tanaka

昭和29年東京生まれ／昭和53年多摩美術大学建築学科卒業、浜野商品研究所環境計画部勤務／昭和55年渡米、A.クインシー・ジョーンズ建築アソシエーツ(ロスアンゼルス)勤務／昭和61年フリーとなる／昭和63年UCLAデザイン学部修士課程、現在ケンタナカデザインスタジオ主宰

田中玄さんは、アメリカはロスアンゼルス在住の建築家でありインテリアデザイナーである。アメリカに渡って10年。独立してから3年になる。

大学を卒業してから浜野商品研究所に入所。2年経ったらアメリカに行かせたいという希望をのんでもらっての入所だった。約束どおり渡米。設計事務所に入った。ずっといるつもりではなかったという。暮らしているうち仕事をす

よりはいいと思って」在住を決めた。これからも拠点を交えるつもりはない。

住宅設計、増改築、店舗デザインと幅広くこなす。独立間もないので、大規模なものより80〜100坪くらいの仕事が多いという。現在、芸術家の仕事場を2

つ手がけている。どういうわけか、クライアントが芸術家という仕事が多いので、田中さんの父上が絵かきだったので、「そういう匂いがするのかも」と笑う。

クライアントが芸術家だと、儲けが少な

アメリカに限らず世界中の建築家やデザイナーが、いま日本で仕事をしたいと思

っているように、田中さんもまたその一人である。この3年間の間にも、いくつか日本での仕事もした。日本からくる

たぐさんの情報をみるにつけ、日本のいまの状況はとても刺激的だという。ただ、デザインがもてはやされすぎて、デザイン過剰気味。デザインしすぎている。過

渡期だから仕方がないが、日常のなかでそれが意識されなくらいになったとき、本物になるのだろうかという。

10年前アメリカに来たとき、随分遠いところに来たような気がしたそうだ。それがいまやとても近く感じる。言葉や習

慣の違いはあっても、きっとデザインに對する考え方の距離がなくなってきたからだと思う、と答える。

田中さんは日本人だけれど、日本を遠くからみつけられる距離と時間のある場所にいる。決して遠ざかることなく、けれども近づきすぎることもない。そして、いまいる場所が田中さんにとって居心地よさそうなことが、国際電話のむこうの空気でわかる。もはや日本人が感じるほど、世界は広くないのかもしれない

と思う。その垣根をひと足早くとび越えた田中さんは、名実ともに国際人である。コップのなかの嵐なんか、彼は笑いとばすだろう。

